



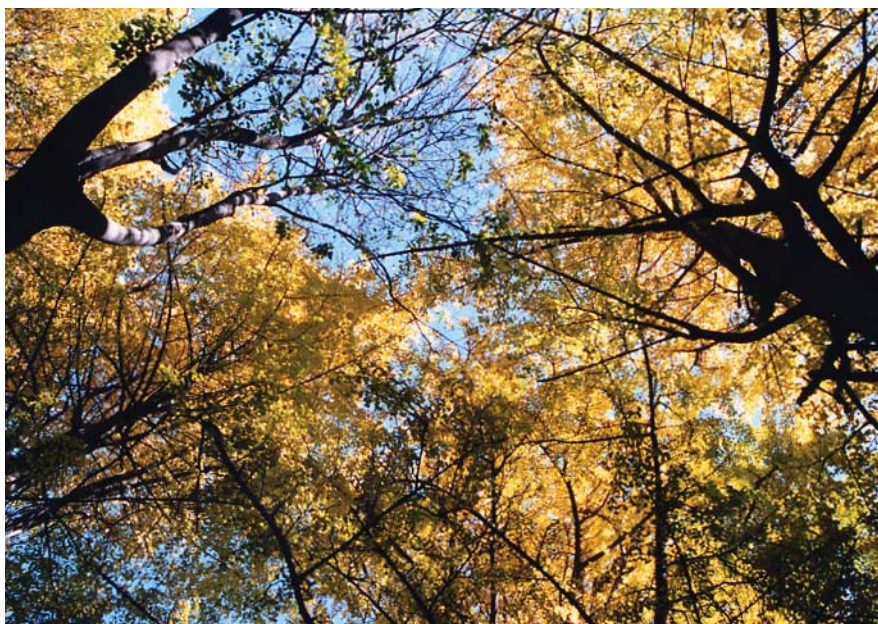
東京大学医学教育 国際協力研究センター

東京大学医学教育
国際協力研究センター

〒113-0033
東京都文京区本郷7-3-1
医学部総合中央館212
TEL 03-5841-3583
FAX 03-5802-1845

E-mail:ircme@m.u-tokyo.ac.jp
http://www.ircme.u-tokyo.ac.jp

表題：海野濤山書



センター前の青空に輝く銀杏の葉

International Research Center for Medical Education

CONTENTS

- ◆外国人客員教授Dr.Georges Bordage紹介2
事務補佐員 三浦和歌子
元・客員教授 Dr.Georges Bordage
- ◆Dr. Bordage連続講義 “Scientific Writing Series”2
前・研究支援推進員 當山 紀子
- ◆Dr. Bordage講演会「東大医学部の試験問題に関する分析と提案」3
センター助教授 大滝 純司
- ◆Dr. Bordage特別講演 “Developing Leaders in Medical Education
—Role of the Medical Educator”3
センター研究機関研究員 若林 正
- ◆アフガニスタン医学教育プロジェクト事前評価調査4
センター講師 水嶋 春朔
- ◆日本医学教育学会ワークショップ5
センター講師 水嶋 春朔
- ◆アフガニスタン高等教育省ファエズ大臣ご一行東大来校5
センター教授 北村 聖
センター講師 水嶋 春朔
- ◆ミュンヘン大学医学部訪問と「生命科学と医学教育シンポジウム」6
センター長 加我 君孝
- ◆ミュンヘン大学より2人の女子医学生が臨床実習に来る6
センター長 加我 君孝
- ◆医学教育学会行動科学・人間関係教育委員会Workshop in Tokyo7
センター助教授 大滝 純司
- ◆<著書紹介>7
ゴードン・L・ノエル外国人客員教授による「変貌する日本の医学教育」
センター長 加我 君孝
- ◆<ビデオ・書籍紹介>7
①新医師臨床研修制度対応ビジュアルプログラム「研修医のための基本技能」
②NHKスペシャル「カルロ・ウルバニの27日」
- ◆センター3階スペース増設7
事務補佐員 田口 淑子
- ◆センター日誌/編集後記8

外国人客員教授 Dr. Georges Bordage 紹介

センター事務補佐員 三浦和歌子



センター客員教授室にて

カナダご出身のGeorges Bordage教授は、ラバル大学医学部卒業後、ケース・ウェスタン・リザーブ大学で生物統計学・情報科学の修士課程を、ミシガン州立大学で医学教育に関する教育心理学の博士課程を修められました。医学教育の研究者・指導者としてロンドン大、ミシガン大などで業績をあげられた後、医学教育学大学院としては世界トップクラスにあるイリノイ大学で活躍しておられます。医学教育における記憶や判断に関する認知心理学とそれに関する評価が主な研究領域で、世界的に評価が高いカナダの医師国家試験の開発に大きな影響を与えておられます。2004年2月1日から7月末日までの半年間、医学教育国際協力研究センター客員教授として滞在し、医学教育の研究に専心されました。また、研究の傍ら、学内外で約10回の講演をこなし、ご自身が編集長を務める医学教育雑誌“Medical Education”の査読にも携わるなど、フル稼働の6ヶ月間を過ごされました。どんな仕事もすぐその場で解決なさる姿勢や、時間の管理のしかたには私どもも見習うところが沢山ありました。また、良質のものを人と分かち合うことを好まれ、お菓子や昼食のおかずなどを「美味しいから」とセンターのスタッフに気軽に分けてくださったことも思い出されます。日本訪問

は過去10回を数え、日本文化や料理の奥深さにはことのほか理解と尊敬を示され、Joanne夫人とともに日本滞在を心から楽しんでおられました。次の文は今回御寄稿いただきましたBordage教授からのメッセージです。

My visiting professorship in the IRCME

Spending six months in the IRCME was an honor and a privilege. It was an honor to be part of a university with such a rich history and high standards. After six months there, I share the pride of the faculty and students of Todai in their institution. It was also a privilege to be part of Todai and the IRCME and to be invited, for example, to give an interactive lecture series to faculty or graduate students on scientific writing and study design, to collaborate in the planning of research projects (such as the project with Otaki-sensei on a Hypothesis Driven Head-to-toe Physical Exam Procedure), and to analyze basic science exam content and statistics and discuss the results with faculty. I wish to thank each and every faculty member and the staff at Todai and in the IRCME for their warm and generous hospitality. My wife and I will cherish the fond memories for a long time. I miss you all and look forward to working with you again in the future.

Georges Bordage, MD, PhD

Dr. Bordage連続講義 “Scientific Writing Series”

前・研究支援推進員 當山紀子



医学部図書館3階333号室において、5月19日、26日、6月2日の3回にわたり、ボダージュ教授による連続講義「Scientific Writing Series “Getting your Manuscript Accepted: Structure, Words & Process”」が行われました。大変関心の高いテーマであり、参加者は100名を超えました。

内容は以下に示しますように、第1回は「論文の構造について」をテーマに、5つのステップの考え方や、「IMRAD (Introduction, Method, Result, Discussion)」の書き方が紹介されました。第2回は、「難しい英語表現を克服しよう」と題し、日本人の間違えやすい英語表現を中心に、より具体的な説明をして頂きました。第3回は、「原稿の準備と雑誌への投稿」として、原稿の準備や手順をチェックリストなどを紹介して頂きました。いずれの講義も、事例を用いた具体的な修正方法とともに、実際に投稿前の論文を用いて添削を示しながら説明をして頂きました。この講義の後、論文を書く手が進んだ方が多い

のではないのでしょうか。なお、ボダージュ先生の講義のスライドはセンターホームページより閲覧・ダウンロードすることが可能ですので、是非ご参照ください。

講義の内容

はじめに

「何故論文がリジェクトされるのか？」

第1回 論文の構造について

1. 5つの“簡単な”ステップ
2. Step1 メッセージは何か？
3. Step2 キーポイントは何か？
 - 3-1 背景、対象
 - 3-2 計画
 - 3-3 場所
 - 3-4 参加者
 - 3-5 介入
 - 3-6 主な結果指標
 - 3-7 結果

3-8 結論

4. Step3 タイトルのつけ方
5. Step4 著者は誰？ 3つの条件
6. Step5 投稿雑誌は何か？

第2回 難しい英語表現を克服しよう

1. センテンスの構造
2. パラグラフの構造
3. 言葉と表現法
 - ① Varying terminology
 - ② Incorrect word
 - ③ Double negatives
 - ④ Passive voice
 - ⑤ Numbers
 - ⑥ 「A」 or 「the」

⑦ Spelling mistakes

第3回 原稿の準備と雑誌への投稿

1. 原稿の準備段階
2. 文章を書く前に：IMRAD
3. ドラフトの作成：最も書きやすいところから始めよう
4. 磨きをかける
5. 投稿前のワンステップ (Friendly critique)
6. エディターの好み
7. アクセプトされるための4つの理由
8. 投稿の準備チェックリスト
9. 投稿後の流れ

Dr. Bordage講演会「東大医学部の試験問題に関する分析と提案」

センター助教授 大滝純司



2004年7月11日の夕方、医学総合中央館（医学図書館）3階333号室大会議室において、当センター客員教授でイリノイ大学（シカゴ校）医学教育学部門教授のボダージ先生による講演会が開催されました。この講演会は当センターと東京大学医学部教務委員会が共同で開催したものです。

この講演会でボダージ教授は、東京大学医学部で行われている筆記試験の内容について、実際のデータを分析した結果を報告するとともに、その問題点と改善策を示しました。同教授はこの領域の研究の世界的な権威であり、最新の研究成果を紹介しながら、ポイントをわかりやすく解説してくださいました。

ボダージ教授が東京大学医学部の試験問題を分析した結果によ

れば、受験者の能力を識別する機能は標準以上の試験になっており、その面では望ましい試験問題であることが明らかになりましたが、多くの試験問題が「暗記力」のみを測定しており、学習者に「解釈」や「問題解決」を求める内容の試験問題が少ないことが、最大の課題であると指摘されました。

そして、(1) 学習者にただ単に暗記する能力だけを問うことは、問題解決能力を修得させるには逆効果であること。(2) 同じ内容の知識を問う場合に、試験問題の作り方を少し工夫するだけで、暗記ではなく解釈や問題解決の能力を問う形式に変える事ができること。(3) 米国の医師国家試験（USMLE）では、全ての試験問題が、暗記ではなく解釈や問題解決能力を測定する形になっていること。(4) 「解釈」や「問題解決」を問う試験問題を作るには、基礎医学と臨床医学を統合させた教科書や参考書が重要であること、など、興味深い過去の研究成果や北米の医学教育の現状、そして望ましい試験問題を作るための具体的な方策についても紹介がありました。これを機に、東京大学医学部の試験問題が、暗記もの一辺倒から脱却することが期待されます。

Dr. Bordage特別講演 “Developing Leaders in Medical Education – Role of the Medical Educator”

センター研究機関研究員 若林 正



講演を行いました。

講演当日は台風10号の接近中で、翌朝の一部飛行機の欠航が決まるなど、落ち着かない状況でしたが、7月30日（金）14：00～15：00の特別講義には多くの参加者が集まりました。

ボダージ先生の講義は聴衆にとって納得の行く問題提起と、根拠に基づく回答、そしてさらなる問題提起から構成されています。まず、「医学教育者（medical educator）とは、いったいどこにいて、何をしている、どんな人なのか？」「効果的な医学教育者になるためには、どんなリーダーとしての資質や準備が必要なのか？」と問いかけられました。

医学教育者は様々な部門で様々な職位に就いているものの、臨床部門に所属する者は少ないこと、仕事の内容・労働時間・職位は様々であり、「何でも屋（Jack of all trade）」として、研究よりも教育サービスに多くの労力を割いていることが紹介されました。

また、これまでの医学教育研究には、学生のパフォーマンスや満足度、もしくは教員の教授パフォーマンスを測定する研究は多いのですが（心理学がアメリカで“University Psychology”〈大学生の心理学〉と擲論されると同じようです）、コスト、専門家意識、卒業生や医療提供者の

動向、患者へのアウトカムについてはあまり研究されていないとの指摘がなされました。

しかし、改めて医学教育者の使命は何かと考えてみれば、質の高い患者ケアを提供できる学生や研修医を育てること、そしてコストなど社会的に関心の高い問題に目を向けることではないでしょうか、と新たな問題提起がなされます。そのためには、あるレベル（たとえば個人）での研究結果を他のレベル（たとえば施設）に一般化することはできないことを意識すること、多施設共同研究や介入・実験研究を推進すること、感度の高い測定手段を確立することが必要だと述べられました。

医学教育者がリーダーシップを発揮するためには、個人とシステムの両方を変化させることが必要です。リーダーには様々な個人的な資質や技能が求められますが、それは生まれながらの資質ではなく、先輩の指導を受けながら、技能を学び、実行し成長する機会を探し続けることで身につけられるものであり、そのために必要なのが教育機関であるというところで、主にボダージ先生の本務校であるイリノイ大学シカゴ校に1960年に創設された、健康専門家教育修士（MHPE：Master’s in Health Professions Education）課程についての紹介がなされました。

18ヶ国から90名が在籍中で、85%を医師が占めており、過去5年間では42名の卒業生を輩出している（当センター客員研究員大西弘高先生を含む）とのことでした。入学の選考基準には、「今もしくは将来、健康専門家教育の領域でリーダーシップを取れる職位にあること」が条件に含まれているそうです。

ボダージ先生は当センター客員教授としての任期を満了され、本務校での忙しいスケジュールに戻るべく、翌日中には何があっても東京に戻らなければならないとのことで、翌朝早い電車で高知を出発されましたが、途中瀬戸大橋が通行止めになり、急遽フェリーに乗り換えて、岡山から「のぞみ」で無事に帰京されました。

なお、ボダージ先生の講義のスライドはセンターホームページより閲覧・ダウンロードすることが可能ですので、是非ご参照ください。

アフガニスタン国医学教育プロジェクト事前評価調査団報告

センター講師 水嶋春朔
センター教授 北村 聖

1. アフガニスタンへの日本からの高等教育支援

アフガニスタンは世界でもっとも保健状況の劣悪な国のひとつであり、妊娠婦死亡率1700/10万出生、乳児死亡率170/1000、栄養不良状態の子供の割合は40%前後と推定される。我が国は2002年1月のアフガニスタン復興支援東京国際会議（議長：緒方貞子氏）においてむこう2年半に最大5億ドルの支援を表明した。教育分野の協力としては、5女子大学（お茶の水女子大学、奈良女子大学、日本女子大学、東京女子大学、津田塾大学）による女子教育支援、東京農業工業大学によるカブール大学農学部と工学部への支援などが開始されて、成果をあげている。当センターは、日本医学教育学会、国立国際医療センター国際医療協力局などとコンソーシアム（協力連携）を形成し、同国の医学教育支援をすすめている。

2. 「アフガニスタン医学教育プロジェクト」の背景

同国では、長期間に渡る内戦やタリバン政権による女性の就学禁止政策等の結果、医師及び医療従事者の人材不足、教育レベルの低下が著しい。過去の調査においても、同国の医師及び医療従事者の配置は都市部に多く地方で不足していることが報告されている。これは教育機関の破壊、教員不足等が原因の一つであると考えられる。また、現時点で機能している医療機関がカブールに集中し、教育を受けた者が地方で保健医療活動を行うことが困難な状況にある。

昨年8月には、アフガニスタン保健医療基礎調査団分遣隊（医学教育）（団長：大滝純司助教授、団員：水嶋春朔講師、原 智佐文部科学省国際協力政策室専門官）が組織され、医学教育の現状について調査し、報告（センターニュースNo.7参照）した。

また昨年12月には、アフガニスタンから、医学教育の方向性を決める実質的な責任者であるGul Mohammad Tanin高等教育省学術調整局局長とCheragh Ali Cheraghカブール医科大学学長の2名をJICA研修員（2週間滞在）としてわが国に迎えた。12月11日（木）、第3回東京大学医学教育国際協力研究フォーラム（主催：当センター、共催：文部科学省、後援：独立行政法人国際協力機構（JICA）「アフガニスタンの医学教育支援の展開」が開催され、今後の医学教育の協調的な支援の可能性について有意義な討論がなされた。

同国の医師養成はカブール医科大学（Kabul Medical University：KMU）ほか6地方医科大学で行われている。KMUは70年の歴史を有し、同国の医学教育において中心的な役割を果たしている。同大学では、老朽化したカリキュラム及び教材、実習施設及び実験機材の不足、十分な知識、経験を持った教員の不在など解決すべき課題も多い。

以上を踏まえて、独立行政法人国際協力機構（JICA）は、同大学においてGPを育成するための新しい医学教育システムの実施を目的とした3年間の技術協力プロジェクト「医学教育プロジェクト」を開始するため、事前評価調査団（団長：北村 聖教授、団員：吉田一郎久留米大学医学部教授（日本医学教育学会国際関係委員会委員長）、水嶋春朔講師、JICA人間開発部菊地太郎職員）を派遣することになった。

3. カブール滞在期間：

2004年7月19日から26日

4. 調査及び協議項目

カブール医科大学、高等教育省、保健省及びWHOカブール事務所に対し、現状視察及び情報収集などの調査を行うとともに、下記の項目について協議を行った。

- (1) 医学教育プロジェクトの基本計画（上位目標、プロジェクト目標、成果、活動内容、投入内容など）

- (2) 2005年1月実施予定の国別研修「医学教育」の研修内容
- (3) その他、技術協力プロジェクト実施に係る一般的な事務手続
- (4) 学位取得可能な研修（留学）の紹介（国費留学生制度及びJICA長期研修員制度）

上記協議結果を基に、医学教育プロジェクトの基本計画をProject Design Matrix（PDM）ドラフト及びPlan of Operation（PO）ドラフトに取りまとめ（2005年1月開始予定）、カブール医科大学Cheragh Ali学長の証人の下、アフガニスタン国高等教育省Fayez大臣と合意し、協議議事録（Minutes）に署名した（写真下）。



5. 調査総括

カブール医科大学（Kabul Medical University；KMU）のCheragh Ali Cheragh学長をはじめ、多くの教授会構成員、高等教育省大臣をはじめ、高等教育省ならびに保健省の責任者と協議することができた。特に支援の主な対象となるKMU教授会主要構成員との間で、数回にわたる協議が行われた。

アフガニスタンの医学教育体制の確立のための方略として、首都カブールに設置され、またアフガニスタン医学界の中心であるKMUを支援対象の拠点と位置づけた。

まず人的支援に関しては、日本から長期専門家（毎年2名）ならびに短期専門家（毎年2名）の派遣計画が合意され、その活動の拠点をKMU内の医学教育開発センター（Medical Education Development Center；MEDC）に置き、KMUの医学教育改革、とくに総合臨床医（General Practitioner；GP）育成を目的とした教育体制の確立と、問題発見自己解決型教育のひとつである問題基盤型教育（Problem-Based Learning；PBL）などの新しい教育方法の導入を早期に実現する方針が確認された。またアフガニスタン側からも毎年6人程度の医学部教員を、日本での約8週間の医学教育研修に参加するために派遣することも申し合わせされた。

物質的支援に関しては、インターネット接続されたコンピューターや液晶プロジェクターなど医学教育のための教官教育（Faculty Development；FD）に必要な物品の供与が協議された。

今後、短期あるいは長期専門家として、カブール医科大学において協力活動にあたることに意欲的な医学教育関係者を広く募集していく予定である。ご関心をおもちの方々には、是非、ご協力をいただきたいと切にお願いしたい。



第36回日本医学教育学会大会

「アフガニスタン医学教育国際協力ワークショップ」報告

センター講師 水嶋春朔



第36回日本医学教育学会大会（2004年、高知市）において、「アフガニスタン医学教育国際協力ワークショップ」（31日（土）14:20～16:20）が開催された。尚、第37回同大会は、2005年7月29日（金）、30日（土）に、東京大学（大

長：加我君孝医学教育国際協力研究センター長）において開催される。

2003年度のJICAアフガニスタン基礎調査団分遣隊（医学教育）（大滝純司、水嶋春朔）派遣、カブール医科大学学長ならびに高等教育省学術調整局長をJICA研修員として招聘した経緯を踏まえて、2004年度からJICAのプロジェクトとして「アフガニスタン医学教育プロジェクト」がスタートすることになった。

このプロジェクトは、東京大学医学教育国際協力研究センターを調整担当として、日本医学教育学会国際関係委員会（吉田一郎委員長、久留米大学医学部医学教育企画調査室教授）、国立国際医療センターなど関係機関を構成要員とするコンソーシアム（協力連携）として展開する計画である。7月の事前評価調査団（団長：北村聖、団員：吉田一郎久留米大学教授、水嶋春朔）の派遣報告をベースに、復興期にあるアフガニスタンに対して、どのような協力（研修、専門家派遣、機材供与）をしていくのが効果的なのか、どのような研修を作り上げることが現実的なのか検討を深め、今年度末に予定する国内研修コース（カブール医科大学教員6名をJICA研修員として招聘）のプログラム案を検討した。

座長は、事前評価調査団として派遣されたの吉田一郎教授（久留米大学）と水嶋が担当した。来賓挨拶として、行松泰弘室長（文部科学省大臣官房国際課国際協力政策室）ならびに橋爪章技術審議役（独立行政法人国際協力機構（JICA）人間開発部）から、本プロジェクトへの期待が述べられた。台風10号による悪天候の中であったが、20名の熱心な参加者により、アフガニスタン教育プロジェクト研修コースの開発のグループワークおよび発表、討議が行われ、有意義なプログラム案が形成された。

1. アフガニスタンの医学教育の現状（報告）

(1) 「アフガニスタン医学教育プロジェクト」事前評価調査団報告
水嶋春朔（東京大学医学教育国際協力研究センター講師）

(2) アフガニスタンの保健医療水準の現状
レシャード・カレド（医療法人社団健社会理事長、カレーズの会理事長、JICAアフガニスタン復興支援（保健医療分野）ワーキンググループ委員）

2. 医学教育協力のすすめ方の視点（ミニレクチャー）

(1) カリキュラム開発の方法論

大西弘高（International Medical University (Malaysia)、Senior Lecturer）

(2) Faculty Development Centerの形態と機能

高橋優三（岐阜大学医学部医学教育開発研究センターセンター長）

3. グループワーク《アフガニスタン教育プロジェクト研修コースの開発》

(1) GP育成に主眼をおいたカリキュラム開発に関するモジュール

(2) PBLなどの教育技法に関するモジュール

(3) 評価に関するモジュール

アフガニスタン国高等教育省Fayez大臣がセンターを訪問

センター教授 北村 聖・講師 水嶋春朔



2004年7月に派遣されたアフガニスタン医学教育プロジェクト事前評価調査団（団長：北村 聖、団員：吉田一郎久留米大学教授、水嶋春朔）は、カブール医科大学において医学教育の支援を目的とした3

年間の技術協力プロジェクトの基本計画をまとめ（2005年1月開始予定）、7月25日にカブール医科大学長の証人のもと、アフガニスタン高等教育省のファエズ大臣と合意し、協議議事録を署名した。

8月2日から13日の滞在日程でアフガニスタン高等教育省ファエズ大臣一行が来日した。文部科学省では、アフガニスタンの復興・教育支援を今後も円滑に進めていく観点から、文部科学大臣への表敬、副大臣との懇談会等を行うほか、アフガニスタンへの教育協力を推進している大学等への訪問が計画された。医学教育国際協力研究センターが重要な役割を担っているアフガニスタンの医学教育支援協力の見地から、東京大学への表敬訪問、学内施設の見学が依頼された。

8月11日（水）午後、Fayez高等教育大臣、Nazif高等教育省国際関係局長、Popalカブール大学長、Rawosh教育大学長の一行は、東京大学を訪問した。佐々木毅東京大学総長への表敬訪問の後、廣川信隆医学研究科長・学部長、加我君孝医学教育国際協力研究センター長、北村聖教授との懇談の後、医学教育国際協力研究センターも訪問し、カブール医科大学の6名の教員に対する国内研修の会場となるセミナー室（3階に新設）などを見学し、医学部附属病院を視察した。2週間前にはカブールでプロジェクト計画について協議したばかりであったため、センターの訪問中も終始なごやかに歓談がなされ、セミナー室前の廊下に展示されたカブール滞在中の写真を見てにこやかに当センターを中心とした医学教育プロジェクトへの期待が表明された。



ミュンヘン大学医学部訪問と「生命科学と医学教育シンポジウム」

センター長 加我君孝



左より高木、Patz、広川、加我

東大・ミュンヘン大学国際交流協定に基づいて、両大学の医学部の交流を目的として、2004年5月24日、ミュンヘン大学医学部附属病院で生命科学と医学教育のシンポジウムが開催された。東大側の出席者は、廣川信隆医学部長・高本眞一教務委員長・センターからは北村聖先生、そして小生である。ミュンヘン大学側の受け入れは、解剖学のPutz教授と、日本学の辻教授である。Putz教授は昨年東大を訪れ、その講演を開き、1学年500人もいるミュンヘン大学でチュートリアルや解剖実習がどうして可能なかと疑問を感じた。辻教授はかつて東大駒場の教養学部でドイツ語を教え、岩波文庫からカフカの「審判」の翻訳がある。

主催者側のシンポジウムの参加者は多くはなかったが、良い交流となった。ミュンヘン大学医学部は、かつてアルツハイマー教授が活躍し、今回もアルツハイマー病の研究報告があった。ドイツは国から来る予算が少しずつ減らされており、医学部長がシンポジウムを欠席した理由は政府との予算の交渉で多忙であるためということであった。医学生約15名との懇談会が持たれたが、話題は海外実習のこと・試験のこと・卒後の進路などであった。ドイツの医学教育システムは不安という。2大学間の国際交流で9月に東大病院に短期医学実習に来る女学生とも会うことが出来た。一人は産婦人科・もう一人は救急・麻酔科・耳鼻科の臨床実習を希望している。学生の一人が昨年スペインに行ったが受け入れ体制がよくなかったという。



白いバラ運動の敷石

Putz先生の解剖学教室を訪れた。解剖学教室だけの独立した大きな建物でその中に解剖学教室があった。500人の学生が同時に人体解剖の実習をするには体育館のような規模のものがいいのではないかと思いましたが、まさにそのとおりであった。ここを使って500人の学生が100遺体を50人の指導教官のもとに実習するという。献体はドイツの場合たくさんありしかも研究費も一緒に寄付され、経済的に困ることはないという。研究室では臨床の各科の病気に近いテーマで研究が行われていた。そのレベルは東大の方が高い。

もう一つの圧巻は、解剖ミュージアムである。ここはまだ日本には紹介されていない。東大医学部の標本室の5~6倍のスペースで、人体の臓器あるいは系

統別に実によく工夫された展示がしてある。学生はここでもよく勉強できるようにコンピューターや机が備えられていた。東大の標本室の今後の運営にも参考になると思った。

最後の日にミュンヘン郊外の日本大使館で、ミュンヘン大学の先生方と我々を招いたレセプションがあった。緑に恵まれた環境の良い所で、日独交流のために企画してくれた領事館の皆様に感謝したい。このレセプションでは辻教授と共に日本語を教え、かつ我々の世話を焼いてくれた成富亜紀さんがメンデルスゾーン作曲のピアノ演奏をしてくれた。音楽性豊かな素晴らしい演奏であった。彼女は桐朋音大のピアノ科出身で、ミュンヘン大学のマスターコースでもピアノを学んだとのことである。

今回のミュンヘン大学訪問で強い印象を受けたのが、第二次世界大戦中ミュンヘン大学医学部の学生から起きたナチスに対する抵抗運動の「白いバラ運動」である。ミュンヘンはヒトラーが政治活動の中心としたバイエルン州の州都である。医学部の学生はナチスに反対するビラを配ったり、集会をしたりした。しかし、ナチスに捕まり軍事法廷で次々に死刑判決を受け銃殺された。言語の自由・宗教の自由・市民の個人の権利の保護などを訴え活動したが、結果的に逮捕され死刑となり、銃殺された。この白いバラ運動を長く記念すべく、大学本部の前の広場には彼らが配ったビラの形をしたプレートがたくさん埋め込まれている。さらに大学本部の一階には記念の展示室があり、その歴史がわかるように写真がたくさん展示されている。その時代運動に参加し、助かった高齢の係の方が我々に説明をしてくれた。1933~1945年の12年間はドイツの暗黒時代であると分析されている。ナチスと異なる意見をもつ人々は殺された。白バラ運動の学生の多くはナチスを持つ人・共産主義者・ユダヤ人・芸術家・障害者(児)である。「なぜ国民がナチスのわなにかかったのか、お上に従順であるほかなかったのか、今は激しい議論がなされているという。この経験が現在のドイツの教育では「意識的に意見を持つこと、異なる様々な意見の中で議論し、合意に至るように進める教育」がされている。「正しいというのはいかなるのか。正しい意見は一つではない」という考えに基づく教育である。

ところで東大医学部に海外のゲストが来られた際には、学内の施設を見せるだけではなく、弥生門を出てすぐ右のブロック塀にある「東大医学部戦没者の慰霊碑」を案内し、歴史を振り返る医学も歴史の中の存在であることを思い起こす機会にしたい。

今回の訪問で、シンポジウムへの参加を通して第2次世界大戦を振り返り、この経験を教育に生かす着想を得ることができた。国際交流の良い点は現地を訪れて初めてわかることが多いことである。

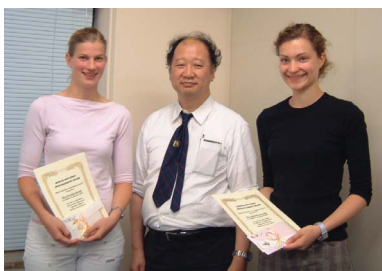
今回の訪問で、シンポジウムへの参加を通して第2次世界大戦を振り返り、この経験を教育に生かす着想を得ることができた。国際交流の良い点は現地を訪れて初めてわかることが多いことである。



解剖学教育ミュージアム

ミュンヘン大学医学部より2人の女子学生が臨床実習に来る

センター長 加我君孝



左よりブリア、加我、シュレーダー

ミュンヘン大学医学部との相互交流により、2004年9月、シュレーダーさんとブリアさんの2人が、海外における臨床実習プログラムにそって3週間、東大病院で実習をした。これまで東大の医学部の学生が海外に行くだけの一方通行であったが、このような相互交流は望ましいことである。シュレーダーさんは耳鼻科・救急・麻酔科を1週間ずつ、ブリアさんは産婦人科を3週間体験した。2人は代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターに宿泊した。実は海外の大学から東大で臨床実習を希望する学生が少なくないが、問題は宿舎である。東大には海外の学生のための宿舎が用意されていないため、ホームステイあるいはビジネスホテルになってしまう。山上会館は1泊3,000円で安いのでありがたいのであるが、研究者を対象としており、学生を泊めることはできない。ただし、教養学部では三鷹のロッジと契約しており、海外の学生を泊めているという。

この2人にドイツの医学教育について聞くセミナーをセンター主催で開催した。そのレジメを紹介する。

「ドイツには医科大学は36校あり、8万人が学んでいる(我が国は80の医科大学がある)。ミュンヘン大学医学部は5,500人の学生(うち半分が女子)が学んでいる。関連病院は5つ。教育の内容は臨床前期が1~4学期、臨床第I期は臨床の基礎で5~6学期、ここで国家試験パート1がある。臨床第II期は臨床実習で7~10学期。ここで国家試験パート2がある。臨床第III期は臨床実習ばかり、11~12学期という。これが終了すると国家試験パート3がある。

臨床前期は日本でいう基礎医学そのものであるが、特別コースとして看護3ヶ月と救急体験がある。国試パート1は2日にわたるMultiple Question形式320題と2科目の口頭試験がある。不合格率24.6%。臨床第I期は東大でいう臨床科目の系統講義がある。特別コースとしてハーバード大学のPLB教育がグループ6~8人で行われる。BSL、循環器と免疫・感染症コースもある。国試パート2はMQ試験290題、不合格率10.8%。臨床第II期は2年間で4学期を行う。臨床の全科目の講義と臨床実習、研究室配属、BSLなどである。この時期もPBLが行われる。神経内科・精神医学・筋骨格学も行われる。クリニカルクラークシップを4ヶ月行う。その後国試パート2は4日間かけてMQ問題480題、口頭試験が2科目行われる。不合格率5.3%。内科4学期。残りの4学期は選択。国家試験その3は口頭試験で外科・内科・選択科目。これを終了すると医師免許が与えられる。

授業料は無料。そのためスカラシップはない。M.D.を得るには研究し、学位論文を提出する必要がある。1年生からも始められ、3~5年までに終了する。臨床と基礎に分かれるが、臨床では臨床データをもとに半年ぐらいで完成させることができるためM.D.への最短距離と言われる。基礎研究の場合は1~2年で完成させる。テーマは与えられる。83%の学生は国試パート3と学位論文の2つを成し遂げている。

卒業後の進路の別の道として、病院管理・マスコミ・製薬会社・医療情報などがあり、選ぶものが多い。医師の職業は労働環境が良くないからである。進路変更のためにM.D.という肩書きが大切になってくる。

学生生活は毎週25~30時間、講義や実習がある。スカラシップがないのでアルバイトをしている。

以上のごとく、ドイツの医学生は教育も生活も厳しい状況にあるようである。今回受け入れた2人の女子学生のために、北村聖教授が働きかけ、日本地域医療推進財団より1人当たり10万円のスカラシップが授与され(写真)、大いに喜ばれた。

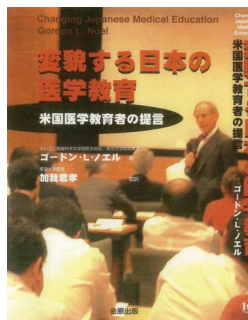
日本医学教育学会行動科学・人間関係教育委員会Workshop in Tokyo

センター助教授 大滝純司

2004年6月11-12日の二日間にわたり、医学部総合中央館を会場に、「日本医学教育学会行動科学・人間関係教育委員会Workshop in Tokyo」が開催されました。行動科学や人間関係に関する教育は、医学教育の中で近年特にその重要性が認識されるようになってきていますが、その内容については研究が十分であるとは言えない状況にあります。このワークショップは、そのような現状について関係するさまざまな領域の指導者が集まって意見や情報を交換する機会にしようとして、日本医学教育学会の行動科学・人間関係教育委員会（委員長：東京医科歯科大学 中村千賀子教授）が企画したものです。同委員会に当センターの北村聖教授が委員として参加している関係もあり、当センターとしてこのワークショップの開催に全面的に協力しました。全国から集まった27名の参加者は、行動科学・人間関係教育に関する理論から実際の教育方法まで、幅広く活発な議論を交わすとともに、親交を深めることができました。

ゴードン・L・ノエル外国人客員教授による「変貌する日本の医学教育」2004年7月30日翻訳出版

センター長 加我君孝



オレゴン大学内科学教授で、医学教育担当のゴードン・L・ノエル教授は2001年10月から2002年3月までわれわれのセンターに滞在し、医学部の教育に大きな影響と刺激を与えた。滞在の間、米国と日本の医学教育を比較しながら、東京大学医学部で計6回、京都大学で1回の講演を行った。その講演内容に帰国後大幅に手を入れ、日本の医学教育に関係するすべての人々のために書き直し翻訳出版した。米国医学の歴史的発展、現在の医学教育がどのような社会・経済的背景のもとに生まれ、今はどこへ向かっているのか等、重大な内容が書かれている。翻訳は当センターにこれまで関わった6名で分担翻訳を行った。

第1章 米国の医学教育の歴史 1776～2000年（訳：加我）	しているか
第2章 米国におけるクリニカル・クラクシップの起源と発展（訳：福原・西田）	—教員は良い医者を見分けられるのか（訳：大滝）
第3章 医学学校における教育目標および構造の変化—米国1960～2001年について（訳：福原）	第6章 医師に対する総合的な教育計画のための書真—臨床入門、PBL、クリニカル・クラクシップを超えて（訳：松村）
第4章 問題基盤型学習方法：理論から実践へ（訳：水嶋）	第7章 日本の医学教育に関する米国の医学教育者としての印象—能力と機会（訳：北村）
第5章 教員は医学生や研修医の臨床技能をどの程度正しく評価	

この本は多くの人に読んでもらいたいと願っている。我が国の医学教育は昭和40年代以降にベッドサイドティーチングの導入が始まり、最近ではPBL、チュートリアル、クリニカル・クラクシップ、OSCEなど米国からの輸入ばかりである。米国の医学教育には教育スタッフの数が我が国の何倍もあり潤沢であること、一方患者の入院期間が東大病院では平均20日であるのに対し数日に過ぎなく、ベッドサイド教育が困難である医学教育革命のために学部長室が中心となる組織があるなど大いに異なる。本書は米国のマネの医学教育から脱し、日本らしい医学教育を創造しなさいというメッセージでもある。

ビデオ紹介①「研修医のための基本技能」

センター助教授 大滝純司

新医師臨床研修制度対応 ビジュアルプログラム「研修医のための基本技能」(丸善)

これは研修医向けのビデオ (DVD) 教材です。2004年春から必修化された臨床研修においては、将来専門とする分野にかかわらず頻度の高い疾病や外傷に適切に対応できるよう、基本的な診療能力を修得することが、研修医に求められています。このビデオは、そのような初期臨床研修の参考資料となるよう、各領域の専門家の監修・指導のもとに、身体診察や医療面接、そして基本的な検査や治療手技などについて幅広く取り上げたもので、全25巻で構成されています。

当センターの北村聖教授と大滝純司助教授は、全体の総監修に協力するとともに、一部の巻の監修・指導等を行っています。



ビデオ・書籍紹介②NHKスペシャル「カルロ・ウルバニの27日」

センター教授 北村 聖

※ビデオ・NHKスペシャル

「SARSと闘った男～医師ウルバニ27日間の記録～」

2004年度放送文化基金賞本賞受賞

2004年ABU賞

(テレビ：ニュース・ドキュメンタリー番組部門) 受賞

※書籍 「世界を救った医師 SARSと戦い死んだカルロ・ウルバニの27日」

内容：2004年2月15日放送 (52分)

2003年3月、世界がまだ新型肝炎SARSの存在に気づいていなかった時、WHOのベトナム事務所のイタリア人医師カルロ・ウルバニは、院内感染の広がるハノイ市内の病院にとどまり、SARSウィルスの脅威を世界に発信し続けた。最後まで医療の現場に身を置き、亡くなったウルバニ医師が、SARSと闘った27日間を、証言と電子メールで辿る。

われわれとのかかわり：2003年初夏、SARS騒動も終わりにかけていた頃、ウルバニ医師の功績を知るにあたって、是非多くの人にこの事を知って欲しいと思いました。知人を通じてNHKの担当の方とお会いして、「医療事故など、今医師のイメージを悪くするニュースが多いが、こういう医師もいることを知ってほしい」と訴えたのがこの始まりでした。番組には多くの人から感度したという内容のメッセージが寄せられ、多くの医学生も視聴したと聞いています。このような活動も、社会貢献としてセンターの活動の一つとらえられれば幸いです。

センター3階スペース増設

センター事務補佐員 田口淑子



アフガニスタンへの医学教育支援をはじめ、当センターの業務はより広く活発になってきたため、従来からスペース不足が大きな問題であった。この度、医学部総合中央館3階の国際地域保健学、国際保健計画学が移転するのに伴い、その後のスペースを利用できるようになった。4月より改装工事を行い、7月から、資料室・面接室・セミナー室・センター長室・研究員室として使用を開始した。セミナー室は、国内外の医学卒前・卒後教育に関する資料や学術雑誌を集積・閲覧できる場であり、センターミーティングや医学教育ワークショップなど学内外のイベントに活用されている。研究員室は、来年1月に来日するアフガニスタンからの研修生の研修の場となる予定である。7月13日にはこの件にご尽力いただいた先生方、医学部事務の関係者を招いての披露会を開催した。





左より
田口、水嶋、三浦、北村、ボダージュ客員教授 加我センター長、植木、當山、岡村、若林、大滝

センター日誌：2003年7月—2004年3月

■5月 19日	Dr. George Bordage 講義「論文がacceptされるには、どのようなabstractを書けばよいのか：論文abstractの書き方講座Ⅰ」
■5月 23日～28日	ミュンヘン大学・ハイデルベルグ大学（ドイツ）訪問（加我センター長・北村教授）
■5月 26日	Dr. George Bordage 講義 「論文abstractの書き方講座Ⅱ」
■6月 2日	Dr. George Bordage 講義 「論文abstractの書き方講座Ⅲ」
■7月 10日～11日	日本医学教育学会 行動科学ワークショップ（北村教授・大滝助教授）
■7月 13日	Dr. George Bordage 研修講演会「東大医学部の試験問題に関する分析と提案」
■7月 13日	3階セミナー室のお披露目を兼ねた関係各位との懇親会
■7月 19日～26日	アフガニスタン医学教育プロジェクト事前評価調査団派遣（北村教授・水嶋講師）
■7月 29日～30日	日本医学教育学会 ワークショップ「アフガニスタン関連」（水嶋講師）（高知県）
■8月 11日	アフガニスタン高等教育省ファエズ・シャリフ大臣ご一行、東大訪問
■9月 6日～10月1日	ミュンヘン大学（ドイツ）の医学生2名受入れ
■9月 15日	ミュンヘン大学医学生を囲む勉強会「ドイツの医学教育について」
■10月 31日	當山紀子 研究支援推進員離任
■11月 22日～23日	第4回 医学教育ワークショップ
■11月 22日	Dr. Gordon L. Noel 講演会「オレゴン健康科学大学の医学教育改革」
■11月 23日	Dr. Thomas S. Inui 講演会「東大でNew Pathway は適用可能か」
■12月 1日	谷澤由華 研究支援推進員着任

◆このニュースレターの発行にあたり野口医学研究所に多大の御援助を頂きましたことを感謝申し上げます。

編集後記●●●

赤門から医学部本館へ続く銀杏並木が黄金色に輝く季節です。センターでは11月22・23日に元外国人客員教授のイヌイ・ノエル両先生によるワークショップ・講演会が大盛況のうちに開催されました。来年1～2月にアフガニスタンからの第2回研修員としてガール医科大学から教員6名をお迎えする準備も進んでいます。オープンから4年余り、こうして様々なプロジェクトが順調に軌道にのって参りましたのも皆様のご支援の賜物と心より御礼申し上げます。今後もセンターの活動にどうぞご期待ください。（岡）

発行元●●●

発行 2004年12月15日
 発行人 加我君孝
 発行所 東京大学医学教育国際協力研究センター
 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
 TEL 03-5841-3583 FAX 03-5802-1845
 印刷所 三美印刷株式会社